

時は一九八六年六月、四月に起きたチェルノブイリ原発事故の記憶がまだ生々しい頃だった

兄の一言によって、私の最初の海外渡航先はイギリスから中国へと簡単に変わってしまった。

正直言って、中国に興味関心なんて少しもなかった。歴史は好きだったが中国史は大の苦手だったし、吉川英治の『三国志』ですら最後まで読み通せなかった始末。しかしそれでも中国行きに同意したのは、その頃、NHKで放送していた「シルクロード」を面白く見ていたからで、「シルクロードへ行けるのならないか」と安直に考え、中国行きの船に乗ったのである。

二十一日間を私は中国大陸で愉快に過ごし、そしてそれゆえに、中国に何の知識も無く渡航したことを恥じ、帰国後すぐに中国語教室に申し込んだ。次に行くときは、中国語を話せるようになって、との決意からだだった。

もつともこの決意は、中国語教室の初日、教科書を手にして、早くもくじけそうになった。なにしろ当時の中国語の教科書ときたら、教材は「白毛女」や「人民解放軍兵士・雷峰の話」みたいなものばかり。全て中国共産党の思想啓蒙を目的とする内容で、挿絵も社会主義リアリズムの無骨なタッチ。およそ十九歳の女の子の心をひきつけるようなものではなかったのである。

けれど中国語教室には休まず通った。というのも、同級

生と話をするのがめっぽう面白かったからである。今思い返してみても、あの時あの教室に通っていた人たちは、皆一癖も二癖もある人ばかりだった。

一番年長のYさんは、貿易会社を定年退職した人で、若い頃は満州にいたということだった。「わしは李香蘭と踊ったことがある」というのがご自慢で、大陸で習い覚えたでたらめな中国語を話しては、先生に叱られていた。

誰よりも中国語が上手だったKさんは、戦前中国大陸に渡り、中国人と結婚し、そのまま戦後も中国に残った残留婦人だった。文革中に日本人と会うことで辛酸をなめ、離婚し、一九八〇年代になってから帰国したとのことだった。日本で貰える年金が無いといつもこぼしていた。

先生は王という苗字の北京出身の中年女性だったが、文革終了後大変な倍率を勝ち抜いて大学に進学し、その後国費で日本に留学したという苦労人だった。王先生がふとした時に話す文化大革命の話にも衝撃を受けた。

そんな具合に、中国語教室で出会った人々は、私にとつて生きた歴史の教科書そのものだった。無知な私はただ話を聞いては驚くばかりだったが、年配者の皆さんに可愛がられ、知識の空白を埋めるように、中国や中国語に関連する本を次々と読み、中国語を上達させていった。

思い起こせば、私が中国語を始めた一九八〇年代というのは、今では想像がつかないくらい、日中関係が良好で平